

(168) 栃木県足尾町久良沢(きゅうらざわ)上流の 幾つかのマンガン鉱山

栃木県の西部には多数のマンガン鉱山が存在していた足尾山塊がある。これについては参考文献(1)が詳しい。が、この文献は日本全国のマンガン鉱山に渡って紹介しており、足尾地区についてはそれほど詳細ではない。また、日本のマンガン鉱山についての連作の大作である参考文献(2)、(3)がある。が、今回紹介する久良沢近傍の鉱山については1件のみが記述されているだけである。著者は栃木県が出版した参考文献(4)を入手することができた。これには足尾山地の多数のマンガン鉱山の位置が地質図中に鉱山記号で記入されていた。この(4)を手引きに、岩友の協力も得て、多数回にわたり、久良沢近傍のマンガン鉱山跡を探索した。現在の所、4カ所で坑口跡を確認した。それらを総合して報告する。

2022年5月

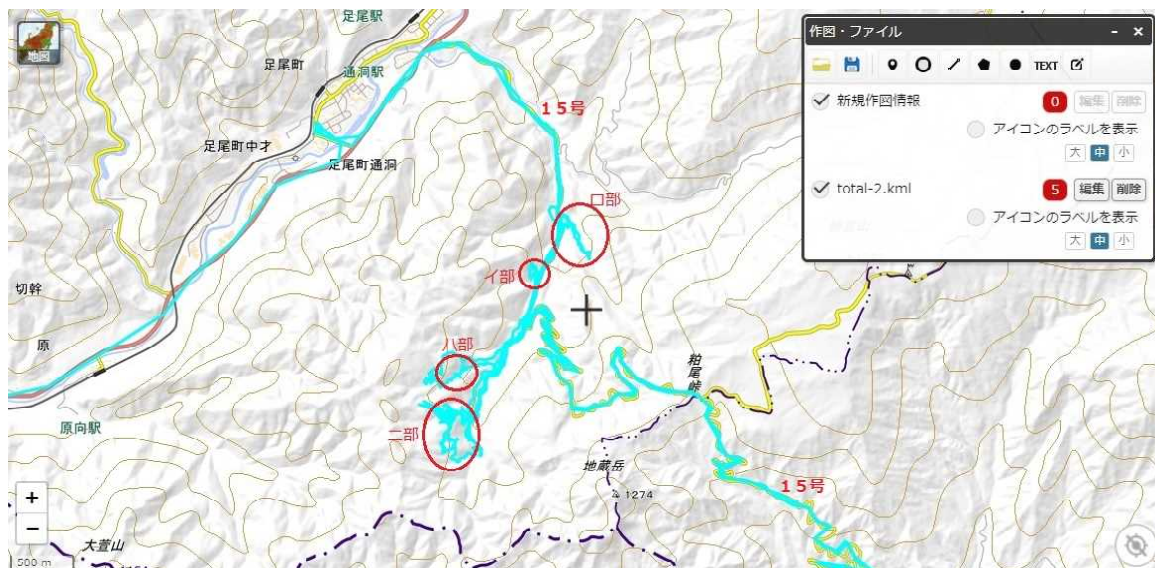


図1 久良沢への車でのルートは足尾町と栃木市の間の粕尾峠を越える15号線を利用する。GPSのガーミンで取得した経路曲線が図中に水色で描かれている。なを、水色の経路曲線はガーミンで得られた複数回にわたる曲線を適当に重ね描いていることに留意、1回だけの経路曲線ではない。主な探索地域の箇所を赤輪で示している。以下で、口部、ハ部、ニ部を紹介していく。

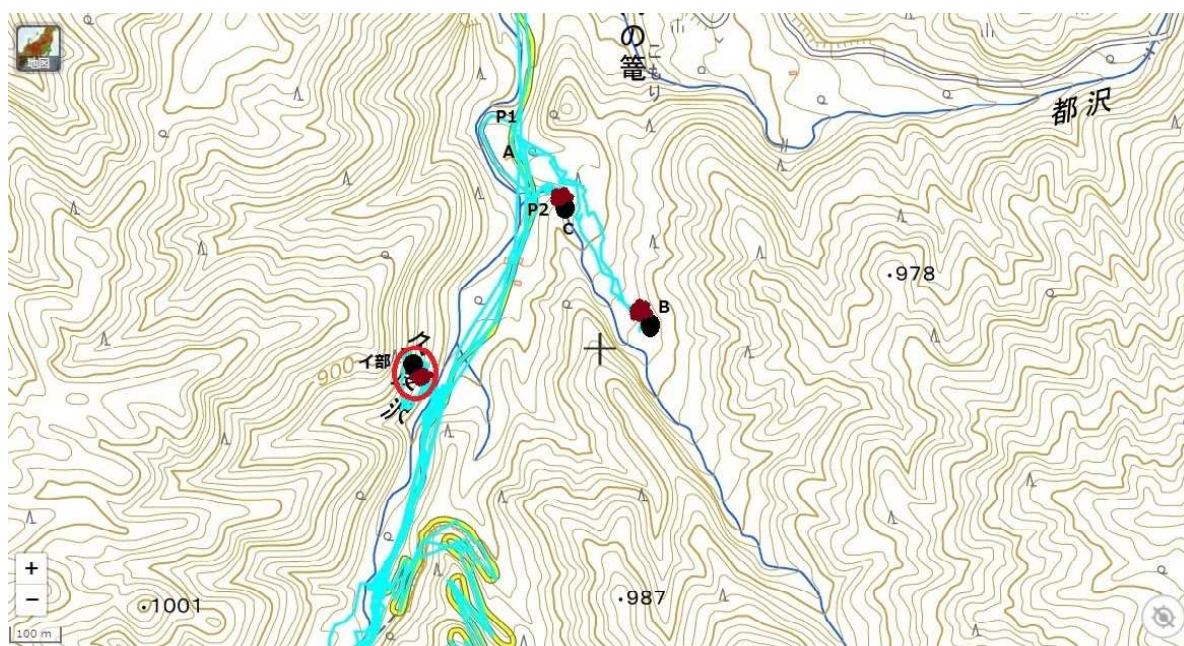


図2 図1中のイ部と口部の拡大図。確認した坑口跡を黒丸で、ズリ跡を茶色ベタで示している。

イ部は「久良沢鉱山」として、本探査記の項（21）で紹介済みであるので、それを見ると良い。ロ部付近では15号線の脇に駐車できる適当な余地がある。駐車地点を文字Pで示している。B点には、A点あたりの林道入り口から登っていく。進んでいき、左側の山の斜面の付け根あたりに坑口跡がある、B点である。その坑口の前はズリのようなものである。C点には、沢脇の空き地P2に駐車すると良い。車を降りて直ぐに沢に入る。沢は大きな丸石が沢山転がっている。それを少し登り上がると、直ぐに、切り立った左岸の崖の下部に坑口跡。C点である。入り口前のズリを茶色ベタで示している。なを、この図を見ると、A→Bの途中でC点に経路が近接していることが見て取れよう。だが、その箇所付近では、C点へは沢の斜面が急峻となっており、降りるのは難しい。その付近で安全に降りられる箇所を見つけられない限り、ショートカットは止めよう。

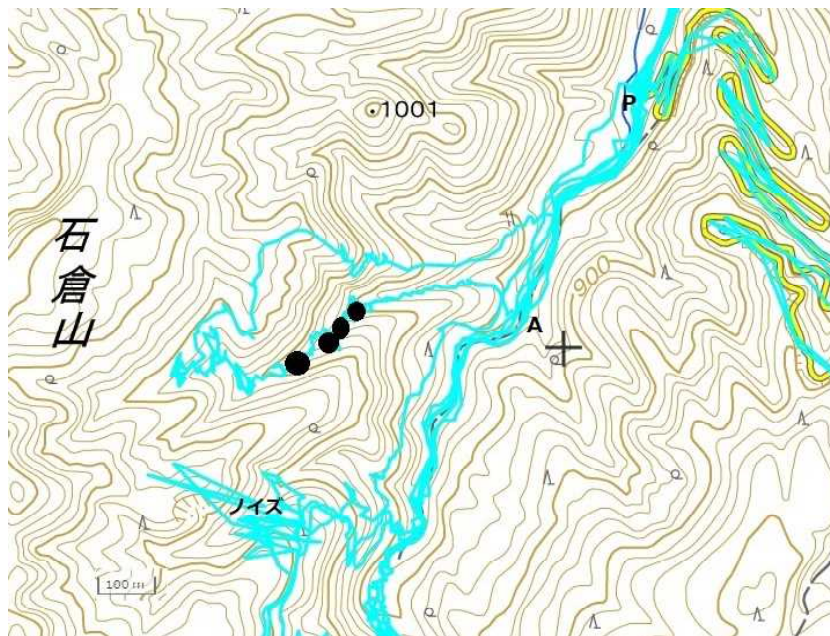


図3 図1のハ部の拡大図。祠のあるP点に駐車し、そこから沢に沿っている林道を登っていく。A点付近で左岸側に見える分岐沢の上流に坑口跡があるが、この沢の入り口は狭くて険しい。分岐沢に向かって左手の山の斜面を迂回して登っていく。沢中には多数の坑口跡（黒丸がその例）、施設跡がある。この沢の更なる上流の探査も兼ねていたので、経路は尾根を経由した大きな迂回ルートを描いている。成果は何も無し。

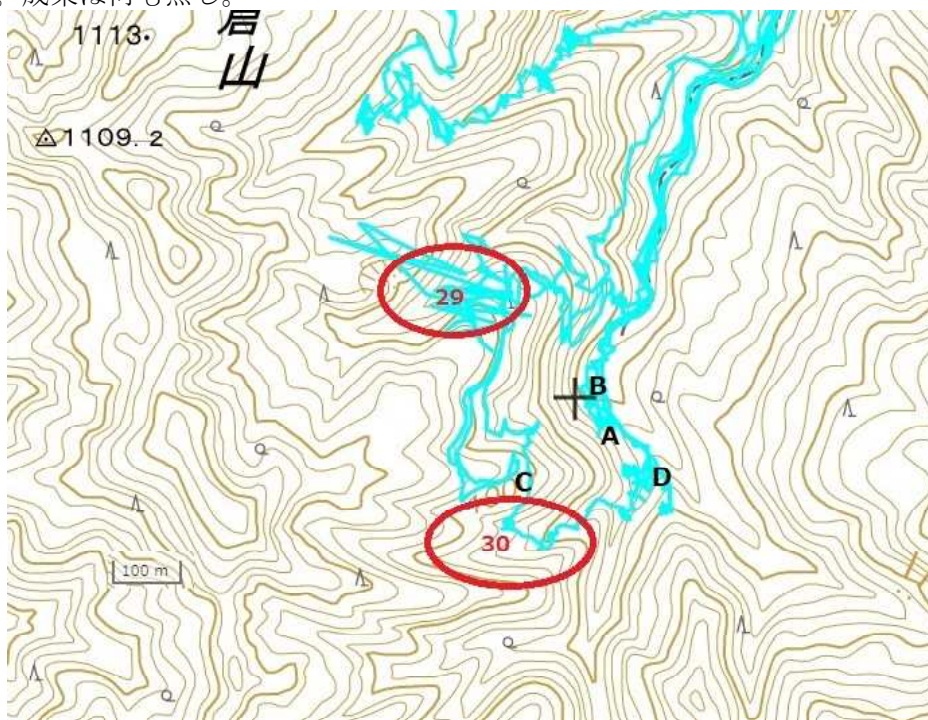


図4 図1のニ部の拡大図。本探査記の項（21）の4ページに添付資料として参考文献（4）のこの付近の地質図を掲載している。それによれば、この付近に番号29の「久良沢鉱山」と番号30

の「南久良沢鉱山」があるらしいことがわかった。その予想箇所を図中に赤輪と番号で記している。赤輪29では探査時にまだ残雪が残っており、マンガンの転石も坑口跡も、まだ確認できていない。赤輪30の谷部には同じく残雪のために、入っていない。後日、谷筋を遡ったが、A点で滝に出会い、この谷の遡上は無理と判断した。B点まで少し戻り、尾根沿いにD点まで登り、赤輪30の谷を遠望したが、木々などで見通しはできなかった。また、B点からの下り斜面は急であり、先に進むのを断念した。結局、C点から入谷するのが良いのかもしれない。さらに後日、C点を経由して、5月下旬に赤輪30に入った。沢を下り、久良沢の本沢との出会いに下った。その間、この小沢に、何の鉱山跡、転石も確認できなかった。その後、D点付近で下り向きでの右手の尾根に出た。そしてB点へと。なを、逆経路B→D→沢への経路は不安なくたどれることを確認した。

結局、赤輪29、赤輪30の谷筋で鉱山跡らしい痕跡を確認することはできなかった。参考文献(4)の鉱山記号のマーキング位置が怪しい？ あり得ることである。久良沢上流付近の何回にもわたる探査の結果は総括として後述している。

鉱山跡写真

口部



写真1 15号線から図2でC点のある久良沢の支流沢を見る。赤矢印。写真の右の方に適当な空き地がある。そこに車を止めて、この沢に入る。

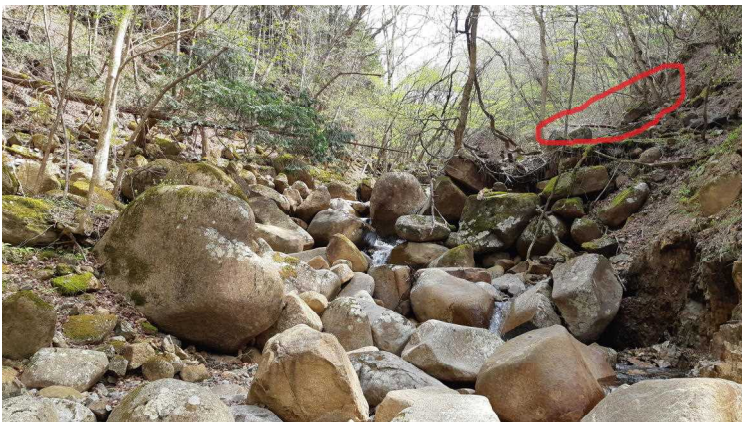


写真2 入った沢の様子。大きな岩がごろごろしている。坑口は少し上流の右側にある。赤輪の奥。



写真3 沢から見上げた坑口跡。中央部の黒いところ。赤輪の所。左側の赤輪の所には露頭鉱脈。



写真4 それに近づく。



写真5 入り口からその内部を覗く。



写真6 坑口跡Bへ向かう林道を15号から見ている。赤矢印が林道。



写真7 林道を登ってきた。左側の杉林の奥に、黒い坑口が見えている。赤輪の真ん中。赤輪の真ん中の黒い所。



写真8 入り口より奥を覗く。結構大きな坑口断面である

八部



写真9 図3中のP点である。八部への林道入り口。この付近に駐車し歩くことになる。



写真10 図3中のA点付近で、西側を見ている。中央正面に、久良沢の支沢が見て取れる。赤線。この支沢の上流に鉾山跡。しかし、この支沢の入り口から登るのは難しそう。写真の左側から迂回し登り上がり、少し上の方で沢に入る。

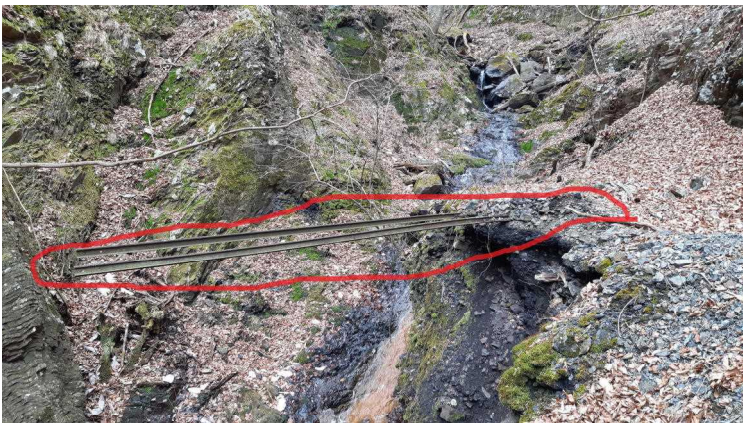


写真11 廃レールが2本中空に伸びている。長い赤輪。右側の崩れ箇所坑口があったと判断。



写真 1 2 多数あった坑口の一つ。



写真 1 3 その内部の様子。



写真 1 4 途中にあった縦穴。赤輪の中。棒の所。



写真 1 5 縦穴を上部から見下ろす。深そう、直ぐ近くまで冠水していた。深さはわからない



写真 16 錆び付いた鉄ワイヤーと、多分、鉱石運搬用バケットの一部。

気になること。参考文献（４）の地質図中には、本探査記の項（２１）「久良沢鉱山」で紹介した位置に番号も鉱山記号もない。何故なのか？ 理由の一つは、この地質図が書かれた当時は、この位置に鉱山は開かれていなかったため。本探査でハ部で確認した多数の坑口跡、施設跡からすると、ハ部が、参考文献（４）が記している２９の久良沢鉱山かもしれないが、沢が一つずれている。

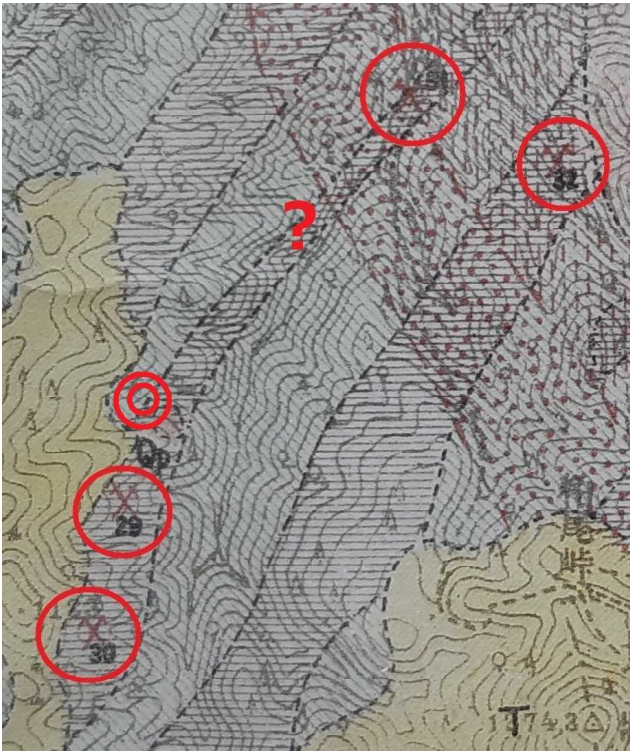


図５ 参考文献（４）から現地近傍地質図の複写掲載。赤輪の２９が久良沢鉱山、３０が南久良沢鉱山、３１が大岩鉱山、３２が大日沢鉱山。？のマークの所には鉱山記号はない。しかし、著者の探査によれば、本探査記の項（２１）で紹介している立派な鉱山跡がある。２重赤輪の谷には図３で示した通り、確実な鉱山跡を確認した。

著者の現時点での結論

- （１）図２中のＣ点は、大岩鉱山、Ｂ点は大日沢鉱山。文献（４）のとおりである。
- （２）この図中の？の箇所、図１中のイ部が久良沢鉱山。
- （３）この図中の２重赤輪の箇所、図３中の鉱山跡が南久良沢鉱山。
- （４）参考文献（４）中の２９、３０の鉱山記号にはその位置に大きな間違いがある。

訂正

本探査の項（２１）の４頁中の添付資料に注釈文中の下３行分「番号３１・・・がわかる。」を間違いとして削除する。

参考文献

- （１）「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、昭和４８年。
- （２）「日本のマンガン鉱山」、吉村豊文、マンガン研究会資料、昭和２７年（１９５２年）。
- （３）「日本のマンガン鉱山補遺 前編、後編」、吉村豊文、吉村豊文教授記念事業会、昭和４２年（１９６７年）。
- （４）「足尾山地地質説明書」、栃木県、昭和３２年（１９５７年）。